

行を著わす、故に變に長ず」(『太史公自序』)とあるごとく、易のうち五行をも含めて理解していたのである。『史記』は黄老とこの五行をも含めた「易」の思想にもとづいて編纂されているが、『史記』全體の構想は易と道論(道家黄老)とを學んだとする司馬談が打ち出したことを暗示している。

敦煌・吐魯番の古代土地制度をめぐって

池田 溫

中國西陲の敦煌・吐魯番二地方については、豊富な文書資料の解讀・分析を通じ、正史以下の傳存文獻では到底窺い得ぬ古代の土地所有・耕營の具體的データが知られ、均田制の施行や租佃制の實態など重要な問題に照明があてられ多くの議論が集中してきたことは周知の通りである。

近年新出文書も加わり地域の事情もおいおい明瞭になってくると、兩地の土地制度を客觀的に評價しその地方的特質を正しく位置付ける方向が當然要請される。本報告はそのためのささやかなこころみである。

大谷文書の欠田・退田・給田簿等により、開元末年西州高昌縣(吐魯番)で均田制の田地還授がひろく實施されていたと認める通説(西嶋定生・西村元佑・仁井田陞・堀敏一・楊聯陞・D. Twitchett等)に對し、根本から疑問を呈しそれを屯田文書とみなす宮崎市定説について、今日の知見に立つて再検討を試みることは、この地の給田

制の特徴を理解するに有益な作業となろう。

次に吐魯番と敦煌の土地制度の差異(田種・租佃普及度・公權の介入程度等)をとりあげその背景を考えてみたい。

なお敦煌では八世紀末から數十年間吐蕃に占領されたが、そこで基準單位ドル(突、一〇畝)による田地計量、分給、課税が行われ、後の歸義軍時代の文書に頻出する土地區劃「畦」の記載にまで影響が及んだとみられる點も、敦煌の土地制度の特殊性を示している。

一六八六年のマドラス「ブラックタウン」

事件

重松 伸司

一六八六年一月、マドラス市(マドラスバットナム)のインド人居住區IIブラックタウンで、突如諸カースト集團によるハルタール(一勢罷業)が起こった。この蜂起はマドラスのイギリス東インド會社を大いに驚かせたが、わずか數日にして終熄してしまつた。

當時東インド會社はゴルコンダのムスリム領主と對立しており、商館都市の城壁構築の必要に迫られ、その費用捻出という名目でインド人に對して新税 House Tax を賦課した。この新税への反對が蜂起の發端であつた。しかし蜂起は單なる反税運動とは異なる性格を持つていたと考えられる。すなわち、新興都市マドラスに集積した、インド人商人及び織布工を中心とするギルド蜂起であり、ギル

ドを核とする都市經營と會社政廳による支配との對立であつた。そこで、この都市蜂起を、1、東インド會社の貿易政策とそれへの在地商人・手工業者層の對應、2、マドラスの都市的性格、3、蜂起集團のギルド的性格、という視點から検討したい。

カロシユティー文書の年代について

長澤 和俊

カロシユティー文書の年代については、先年、ケンブリッジ大學のブラフ教授が二三六―三二一年に比定する詳細な研究を發表され、ついで榎一雄博士はその説を大體首肯されながらも、若干の補訂を加えられて、二五六―三四一／三年とする説を發表された。

これらの高説は多年この文書の研究に没頭された兩碩學の結論として、まさに精緻な考證の粹を盡したものである。しかしここに二、三年、魏晉の西域經營を檢討した結果、私は右の高説に若干の疑問を抱くようになった。

ブラフ教授はカロシユティー文書中に見える王の稱號の變化に注目し、アムゴーク王十七年を二六三年に比定した。それは『晉書』卷三、武帝紀太康四年（二二三）條の

八月、鄯善國遣子入侍

をマヒリ王即位の時のこととし、逆算したものである。

しかし魏晉の西域諸國との關係を追跡してみると、晉初は河西地方に動亂が相次ぎ、かえって魏初の西域經營の方が活潑である。最

近カロシユティー文書を精査した結果、アムゴーク王十七年は魏太和二年（二二八）に比定すべきであり、文書の年代は二〇三―二八八／九〇年に比定されるべきであるとの結論に達した。

インドネシア共產黨武力蜂起の失敗と

メッカ巡禮者との關係（一九二六―二七）

永積 昭

一九二六―七年の交、オランダ統治下でインドネシア共產黨はスマトラ西部およびジャワの各地において武力蜂起を行なった。時期尙早でもあり、準備不足でもあったこの蜂起はオランダ植民地政府によって彈壓され、以後十數年の反動政策時代を迎えるのである。

そのインドネシア共產黨員の大部分は國內で處刑されたり、または邊地に追放されたりした。しかし一部の者はイスラム教の聖地メッカに潛入し、同胞の巡禮者に對して政治宣傳を行なっているとの情報が入り、オランダ外務省および植民省の注目を集めた。

インドネシアで最大の信者数を持つイスラム教は、聖地巡禮を信者の神聖な義務のひとつに數えている。インドネシアは地理的に聖地から最も遠いにもかかわらず、全世界からの巡禮者中、極めて大きな比率を占めていた。とくに問題の時期には、イスラム曆の年廻りもよく、ゴムその他熱帶農産物の好況も幸いして、同地およびマライ半島出身の巡禮者数は、史上空前にのぼった。

政治宣傳を行なっていたインドネシア共產黨員は幹部ではなく、